

# 草地改良ナンバーワン！

## 中島伝作氏（北海道）に

昭和三十七年度北海道集約草地造成改良事業共進会

例年、国の補助を受けて造成される草地について、その成果の共進会が北海道の主権で行なわれるが、昭和三十七年度においては、北辺の地、天塩町の中島伝作氏が最優秀者として選ばれ、農林大臣賞を受賞する光栄を得た。同氏の草地造成利用の概要は、次の審査報告の一部抜萃の通りで、苦心の結果がこの輝く成果を生んだものであり、心から敬意を表すると共に、このような草地造成の熱意と計画性が日本全国の畜産農家に逐次普及することを願ってやまない。（なお、同表彰式には雪印種苗から賞状と副賞を贈呈した）

天塩町、中島伝作氏の出陳草地は、天塩町の東北、南産土部落の同氏所有地内原野で、ウブシ川流域に位置する酸性泥炭地を改良造成した二・六畝の採草用牧草地である。

この牧草地の改良前の状況は、カバ、ハンノキ、ドロ等平均樹径約三〇センチの樹木が一〇呎当たり一五本前後散在し、下草はイワノガリヤス四〇％、笹二〇％、ヨシ一〇％その他三〇％が密生する平坦な泥炭地で、酸

度PH四・〇の農耕不適地であって、家畜の運動兼放牧地として僅か利用されているに過ぎなかった。

天塩地方の不良立地条件を克服する目的から、中島氏は昭和九年以来、乳牛を主体とする畜産経営を続けて来たが、更に畜産規模の拡大、安定を図るため牧草の高度利用に着目し、逐次牧草地面積を拡大し、その一環として、昭和三十年来、遊休原野について土地改良を行ない牧草の播種を行なうて集約草地を造成したもので、造成の経過の概要は次の通りである。

昭和三十年に前記二・六畝の酸性泥炭地に暗渠排水施設を構築、昭和三十一年より三十五年に亘って、補助及び融資を受けて客土作業を行なった。客土した土壌は、附近の若干砂土を含んだ埴土系粘土で、一〇呎当たり平均六坪、特に土壌条件の不良と見られる一・五畝については、更に一〇呎当たり五坪の量を客土している。

昭和三十五年秋までに樹木を伐開、同時に抜根を行ない、トラクターで秋耕、昭和三十六年春、酸土矯正の目的で一〇呎当

り約一トの炭酸カルシウムを施用、トラクターで三回に亘ってデスキングを行ない、砕土、整地及び石灰の混和を図り、更に播種直前に耕耘機により整地を実施している。

平坦地で比較的作業は容易であったが、排水、客土、酸土矯正と一連の土地改良作業を洩れなく実行し、且つ伐木等障碍物の除去も完全であり、過去の原野のおもかげを全く止めていないほど、整理、整地されていることは賞讃に値し、このことが造成後の草生の維持、生産力に大きく役立ったものと判断した。

牧草の播種は、昭和三十六年春、実取用燕麦に混播して実施している。牧草の種類と一〇呎当たり播種量（ギ）は、チモシー一・五、アルサイククロバー〇・五、ラデノクロバー〇・三の三種混播で、基肥として、一〇呎当たり尿素八ギ、過石二〇ギ、熔燐三〇ギ、塩加八ギが施用されているが、立地条件、利用目的から判断して、草種の選定、組み合わせ及び基肥量は適切であって、播種後の萌芽、生育も均一且つ順調であり、牧草播種の技術面も優れたものと推

察された。

昭和三十六年は、燕麦の子実収穫後、牧草は一部掃除刈を行なったのみで越冬、昭和三十七年から本格的な生産に入った。六月二十日一番刈を行ない、一〇呎当たり四、二九〇ギの生草収量をあげ、続いて八月二十七日二番刈、一〇呎当たり一、二六〇ギ、合計五、五五〇ギの収穫をあげている。この間の肥培管理としては、四月下旬萌芽直前に追肥として一〇呎当たり尿素八ギ、過石二〇ギ、塩加一〇ギ、更に一番刈後、七月上旬に尿素五ギ、過石一五ギ、塩加一〇ギを施用して草生の維持増加の万全を期している。全般の草生は極めて良好で、健全且つ齊一な生育を示し、生育密度も良好で追播の必要を認めず、一部にイワノガリヤス、ヨシ、モギなどの在来野草の侵入が見られたが、雑草混入割合は少ない。牧草はいね科、まめ科の混合割合も適切であって、一〇呎当たり生草重五、五五〇ギは、必ずしも多取と考えられないが、前年までの非生産時代に比すれば、飛躍的な増産であり、本年は二番刈において天候不良に災いされ、時期を失し減収したことから、この改善により更に収量の増加の可能性が高いことも考えるならば、天北地方の牧草生産として上位にランクされるものと認められる。追肥の時期及び量はおおむね適切であるが、燐酸については春季に全量施用することが望ましいと思われる。

一番刈はすべて乾草として貯蔵されているが、生草の状態、生産養分などを考慮し